

ゴルフ
ゴルフ

ゴルフコンパ

サーピス精神

S A A B

サイコウ

最大瞬間風速

サイテー

作家

差別化

サマ

三冠王

二ニアお断り

二魔族

雑談師

雑談番組

暫定球

社会現象

社長元気で留守がいい

ンヤネル

山版ギョーカイ御用達

小教法人

上演タレント

死耐ブーム

横澤彪十山藤章二

とらあへず!?

法消解

トスリキ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ

スキシ



とらあへず!!?

横澤彪—山藤章二

講談社

横澤彪

一九三七年、群馬県前橋市に生まれる。東京大学文学部社会科学科を卒業。

一九六二年、フジテレビジョン入社。「ママとあそぼう!ピンポンパン」などの幼児番組を手がけた後、「THE MANZAI」「笑ってる場合ですよ!」「笑っていいとも!」「オレたちひょうきん族」「いただきます」などのヒット番組をプロデュース。現在、編成局専任局長。著書には、「テレビ式ーヒットを生む発想と行動」「プロデューサー感覚」「しごとが面白くなるーシエイクスピア」などがある。

山藤章二

一九三七年、東京に生まれる。

武蔵野美術学校を卒業。四年間、広告会社に勤務のあとフリーとなり、従来にないスタイルのさしえを開拓、講談社出版文化賞(第一回)、文春漫画賞(第十七回)を受賞。「週刊朝日」に連載のニュースエンターテインメント「ブラック・アングル」が大ヒットし、菊池寛賞(第三十一回)を受賞。

著書には「ブラック・アングル」(1~10)「新イラスト紳士録」「対談・笑いの構造」「対談・笑いの解体」「戯画街道」「人の噂も五七五」「オール曲者」「人間ころがし」(1~4)などがある。

とりあえず!?

一九九〇年一月十六日 第一刷発行
一九九〇年二月二十七日 第二刷発行

著者——横澤 彪+山藤章二

定価——一〇〇〇円(本体九七一円)

装幀——山藤章二

© T. Yokozawa & S. Yamafuji 1990, Printed in Japan

発行者——野間佐和子 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三—三 郵便番号二—三〇—

電話 東京三—四五—二二 (大代表)

印刷所——株式会社精興社 製本所——株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えします。

なお、この本についてのお問い合わせは
学芸図書第二出版部あてにお願いいたします。(学二)

ISBN4-06-204662-8

とりあえず!?!●目次

今年こそは	8
とりあえず!?	10
ギョーカイ人の悩み	12
一発二千五百円	14
誉めことば	16
うんこカレー	18
ギョーカイの三冠王	20
名前の呼び方	22
あなたの気持ちで	24
いい仕事しまっせ	26
ギョーカイ流挨拶	28
ギョーカイ病	30
ここはどこ?	32

上海こわい	34
ヤル気をだしてほしいネ	36
男冒利	38
演歌の効用	40
ギョーカイの真心	42
パーティー	44
一杯のかけそば	46
モットー	48
マゾ教の信者たち	50
五億田子連れ結婚式	52
おんな独身貴族	54
オイシイしるし	56
とっさの遊び心	58

もつと稼がせてよ	60	ワンパターンの夢の祭り	86
熱しやすく……	62	近頃の年寄り……	90
ファッショナブルな中年	64	ギョーカイのキーマン	92
ギョーカイの王者	66	やはり隔世の感	94
のようなもの	68	全力疾走	96
出入り商人	70	やっぱり猫が好き	98
ギョーカイの印籠	72	一年一回	100
ギョーカイ人の宿命	74	肉体派の巣	102
冠婚葬祭	76	クサイのはいやよ	104
使い捨てカメラ	78	異物との共存	106
ソース味	80	がんばるオジさん	108
大変な忍耐力	82	駐車場つきの娘	110
嫌われモノ	84		

ネーミング	112
もうひとつの才能	114
商売商売	116
料理オンチ	118
双股・三股	120
厄年は五十二歳	122
ギョーカイのスタミナ	124
将来性大いにあり	126
小さな幸せ	128
四字熟語	130
評論家と評判家	132
居住権	134
バナナの香り	136

ああ、ニシン弁当	138
後遺症	140
悪魔の言葉	142
本当に欲しいもの	144
富山の薬売り	146
いい仕事しろよ	148
お祭り大好き	150
最低のマナー	152
自己改革	154
女と外人にモテるヤツ	156
おいしい仕事	158
ウソ、信じられない	160
バッタの大群	162

やっぱり年季	164
趣味の不一致	166
わくわくのもと	168
ギョーカイの太い野郎	170
尻軽な好奇心	172
ただの雨です	174
常識の不幸	176
タレント相場	178
信仰の域	180
イライラ、ムカムカ	182
消費者の欲求	184
オシヤレな生き方	186
キモチわるーい	188

時代の変り目	190
海の男	192
ギョーカイのジレンマ	194
プロ顔負けの……	196
その男、したたかにつき	198
準備万端	200
主役の交代	202
カラオケ天国	204
タクシ―の楽しみ	206
……なもの、……なこと	208
十五人目の花婿	210
* *	
とりあえず!? ●キーワード	213

とりあえず!?

今年こそは

プロ野球のピッチャーが開幕前に「今年はふたケタの勝ち星をめざしたい」と抱負をのべているのを聞いて、「わがギョーカイと同じだな」とつぶやいたものです。

ギョーカイ人にとつての最大の共通語は**視聴率**です。一般人にとつての戦争とかアチーブメント・テストとか消費税という言葉に匹敵するでしょう。いやそれ以上の意味をもっているかもしれません。

番組がスタートすると、翌日のアサ十時にはコンピュターから弾きだされた結果がデスクに届きます。もしふたケタの一〇パーセントを超えていれば、とりあえず関係者は一同胸をなでおろします。

気の早い連中は「とりあえず盛り上がりうぜ」と夜の六本木に繰りだしたりしますが、本当のところはまずまずの成績といったところです。

視聴率が二〇パーセントを超えたら「そりやもう大騒ぎさ」の世界になります。ギョーカイではこの現象を「**太台に乗る**」といいます。「おめでとう」という電話もかかってくるし、いつも不愛想なお偉いさんもデスクにすり寄ってきたりします。

担当のプロデューサーやディレクターはもうルンルン気分て用もないのに朝早くからデスクに陣取ってアドレッシングをめぐっては知り合いに電話をかけまくり、寝入り端

の飲み屋のママさんを怒らせて溜まっているツケを催促されて、とんだヤブヘビになったりします。

「とんねるずのみなさんのおかげです」のようにぐんぐん数字が上がって二五パーセント以上に達すると、これはもう「**社会現象**」ということになります。テレビ局の首脳が早々と表彰状と金一封を用意しはじめるのもこの頃です。

でも、こんなハッピーなケースは五年に一度あるかないかで、大抵は低視聴率にあえいでいるのが現状です。

ひとケタの数字しか取れないと、番組担当者は首のあたりが冷たくなって夏でもマフラーをしたり、メインの出演者は他局のプロデューサーをゴルフに誘ったりします。

ひとケタでも五パーセント以上と以下では月とスポンのちがいになります。番組担当者は会社で顔をだしてもデスクにいらるのは十分ならず、穴ぐらみたいな喫茶店を根城にこそこそと電話で「つなぎ」をつけるハメになります。

スポンサーが「降りる」といいかねないので、テレビ局の営業担当者や代理店の担当は共同戦線を張って夜討ち朝駆けで大忙しになります。

視聴率がさらに低下して二パーセント、一パーセントのいわゆる「**視力検査**」の状態になると、もはやめだか——救いようがない——になってしまうのです。

万が一、視聴率が※印(コメジルシといいます)になったら、それはもう悪夢としかいいようがありません。おそらくプロデューサーは失踪し、ディレクターは頭の中にできた十円玉大の脱毛をどう隠したらいいか悩んでいるはずです。当然のことながら、その番組の主演者はとつくに降りて、おのれの人気低下という傷口を最小限に食いとめようと、守りに入っています。

テレビの視聴率をギョーカイ風に説明すると「社会現象」「大巨」「ふたケタ」「ひとケタ」「視力検査」「コメジルシ」とじつに六つのランクがあるのです。まるで学校の通信簿みたいですよ。



とりあえず!?

「とりあえず、審査員をやってほしいんですけど……」

ポチが頼みにきました。ポチは水口君といって、「夕焼けニヤンニヤン」でホームランをかつとばしたフジテレビが二匹目のどじょうを狙ってはじめて「パラダイスGOGO!!」という番組のれっきとしたディレクターです。

京大工学部の学生のころ「にっちもさっちも」というコンビで「笑ってる場合ですよ!」の「お笑い君こそスターだ」という素人演芸コーナーに漫才をやりきたポチが、フジテレビに入社して七年、いまやりっぱなディレクターに成長しているのですから歳月の流れの早さに驚かされてしまいます。

この「パラダイスGOGO!!」でお笑いの新人発掘コーナーを企画したのでばくに審査員をやってくれというのがポチのお願いのスジなのですが、「とりあえず」という枕詞がひっかかります。

この言葉もギョーカイで頻繁に使われるのですが、ポチのいった《とりあえず》には「もし当らなかつたら、このコーナーはすぐにやめるかもしれないので……」という懸念とエクスキューズが籠められているからです。

《とりあえず》はゴルフでいえば**暫定球**といったところですが、ギョーカイの《とりあえず》には、仮にとかつなぎにという意味合いのほかに、やんわりと逃げ道をつくって

おこうという**自衛本能**が脳細胞を経由せずに命令しているというフシがあります。

玉虫色の表現でシッポをつかませまいという遊泳術でもあり、目くらましの煙幕でもあります。

つまり《とりあえず》という言葉が飛び交うときはジャブを繰りだして、瀬踏みをしていると判断してまちがいないのです。

ディレクターとプロダクションのマネージャーとの電話のやりとり。

「とりあえず来週の月曜日、〇〇さんのスケジュール空いてますか」

「とりあえずどんな番組でしょうか」

「とりあえずバラエティです。とりあえずトークのゲストでお願いしたいのですが……」

「とりあえずその日はOFFでゴルフの予定が入っていますが、とりあえず本人の意思を確認してみます」

「とりあえずOKかNGかお返事いただけますでしょうか」

「とりあえず明日電話を入れます」

「とりあえず三時ぐらいにお願いします」

「わかりました。仮に本人がOKといったら、とりあえずギヤラはいくらぐらいいただけますでしょうか」

「ギヤラの件はとりあえずプロデューサーと相談しておきます」

いやはやりっぱな《とりあえず症候群》です。

こうして見ると《とりあえず》は生臭い衝突を回避するためのショックアブソーバーの役割りをしているのかもしれないが、ウソのはじまりのような気がしないでもありません。

とはいっても、ぼくもこの世界に三十年近く棲息していますから、すっかりこの《とりあえず症候群》に罹^{かか}っていて、夕刊フジの担当の金田さんに電話して「とりあえず原稿上がりかもしれませんが……」というにきまっています。

ミスター とりあえず

暫定球



'89
夕刊
フジ

ギョーカイ人の悩み

正直いって、タモリの話は書きにくいのです。

いまから七年前「笑っていいとも!」を始めるとき、タモリとぼくの間にある約束をしました。

「相互誓め称え条約」を締結したのです。

インタビュアーを受けても、タモリはぼくのことをけつして「クソじじい」などと貶さないし、ぼくはタモリのことを「俄成金」とやっかんだりしないというものです。

「貶して損する芸能界、誉めて得する芸能界」

というのがタモリのモットーですが、これは流石だと感服します。

ギョーカイにはややもすると、重箱の隅を突つて自分の存在をアピールする不逞の輩も多いのですが、こういう連中はスライスして消えていってしまします。

スライスというのは、もともとゴルフ用語ですが、ギョーカイで「スライス」というのは、まったく意味がちがいます。

ギョーカイでは、タレントの人気にかげりかてたり、時めいていたプロデューサーが閑職に追いやられたりするのを「スライス」というのです。

ブラウン管から「チーズはスライス雪印」というコマースヤルが流れたので、あわててスイッチをOFFにしたという神経質なギョーカイ人もいるくらいなのです。

タモリの話からスライスにいったからといって、べつにタモリがスライスしているという意味では毛頭ありません。

例の条約が存在しているかぎり、もしそんな思いが頭の中をよぎったとしても口には出せないのです。

ぼくの見るところ、まったく逆で、タモリはタレントとしてギョーカイの階段を一步一步着実に登って、いまや押しも押されぬ大御所になっています。

家が近くなので、ちよくちよく「いいとも御殿(ギョーカイではタモリの豪邸をこう呼んでいます)」へ遊びにいきますが、家の中ではボサボサ髪に素通しのメガネにジャージというのがタモリのファッションです。

「最近、モノ忘れがひどいんだよ。何かやろうと思っても、何をやろうとしたのか、それを忘れちゃうんだよ」とタモリ。

「看板なんかも自分勝手に解釈して読んじやうんだよ。八王子で『ロータリークラブ』って書いてあるのを平気で『ロリータクラブ』って読んじやってさ……。そうそう作家の北方謙三を『はっばうさんけん』って読んで、後で驚いたり……」

タモリは昭和二十年生まれですから、この八月で四十四歳になりました。

タレント稼業はストレスもきついし、過酷なスケジュールをこなして走っているうちに、急激に老化がはじまるのかもしれない。

「新しい刺激を受けにいろんな所へ出かけたなら……」というところで、ぼくはぐつと詰まってしまいました。

タモリが世界漫遊でもおっぱじめたら「笑っていいとも！」がつつかなくなってしまうからです。

「衣食足りて老いを知る」、これがタモリばかりではなく、ギョーカイ人の悩みのようです。



古くさいようですが芸能界には師弟関係という縦の社会が厳存しています。落語とか相撲とか長い伝統の重みがきしんでいる世界では、いまだに師弟とか兄弟とかいう関係が絶対的で「無理へんにゲンコツ」がまかり通っているようですが、ギョーカイ全体では、この関係はかなり緩やかになっているような気がします。

屋根に登らせたら日本一といわれる大御所のM・Hさんとか舞台で放浪千回近くという女親分のM・Mさんなどは、実力充分の上に面倒見もいいので、自薦他薦の弟子入り志願が後を絶たないようです。

ギョーカイにもちよびり可愛気のある「親方日の丸」寄らば大樹の蔭」といったムードがあるといつても過言ではありません。

逆に弟子が売れに売れて、そのお陰で師匠が恩恵を受け、オマケで売れるという「おしやれ小鉢」現象もチラホラ見かけます。

でも、タレントは元手は体しありません。昨年夏急逝した親友の東八郎さんを師と仰いでいた人たちは悲惨で過酷な運命にあえいでいるのです。東八郎を陰で支えていた賢夫人はがっくりしたのか筋無力症という難病にかかって入院生活を余儀なくされていますし、「笑塾」というコメディーアン養成機関は閉鎖され、弟子たちは散り散りになりま

した。

おまけに、東さんと苦楽をともしてきた名物マネージヤのYさんもこの三月にポツクリ亡くなってしまいました。団地の集会場できり行なわれたYさんの淋しい葬儀に参列して、しみじみとギョーカイの無常さを感じたものです。

でも愉快な師弟もいます。吉本興業の所屬で売れっ子のK・Bという落語家があります。独特の刈り上げヘアにまん丸メガネといえはギョーカイ通でなくてもハハーンと思いつたるかと思いますが、K・Bの弟子の話というのが大傑作なのです。

K・Bのお弟子さんが駆け出しの落語家の卵としては分不相応な豪華マンションにひとり住んでいたのですが、ナウい女性が押しかけてきてズルズル同棲をはじめました。

同棲三週間目、弟子が半ベソをかきながら師匠のK・Bの家にきて「やられました」と告白しました。件の女性が、弟子にとつては虎の子の貯金を全部引きだしてドロシしてしまったのです。なんでも寝物語にキャッシュカードの暗証番号をたくみに聞きだされてしまったというお粗末さ。

「そりやお前、結婚詐欺、籠脱詐欺、小便組というのや」